
異端と呼ばれた子供たち

混沌の使者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異端と呼ばれた子供たち

【Nコード】

N4649BA

【作者名】

混沌の使者

【あらすじ】

世界を愛す者。

世界を愛せない者。

彼らは愛を求める。

（前書き）

これはちょっとした練習です。

ハードルは下げて、下げて、下げてお読みください。

世界は色褪せている。

人も物も背景もすべてが灰色に見える。

屋敷の縁側に座る少女は、退屈そうに外を見た。

少女にとっての世界を見つめるために。

しかし、少女にとって色褪せていない世界が現れた。

ド派手な桃色の髪。端正な顔立ちながらも、幼さの残る顔。服装は泥だらけで汚らしい少年。

少年は少女にとって、見たことない世界だった。

「世界は美しい！　そうは思わないかい？」

そう言うのはド派手な桃色の髪を揺らす少年。

それを家の縁側に座る和服を着た長い黒髪の少女が、心静かに聞く。なんと絵になるのは、周りに散る桜のせいか……。少女のその姿は正に神秘的だった。

そんな少女が少年の言葉に、風で流される長髪を押さえながら、言葉を返す。

「妾にはわからぬな……。妾にとっての世界はここしかない。この世界はすべて色褪せて見える」

どこか……。ここではない遠くを見つめて、寂しそうに語る……。そんな少女の姿は儚げで、少し触っただけで壊れてしまいそうだった。

少年はその姿に心奪われる。偶々ここに出てしまい、たった今会ったばかりの少女に。

そうして絶句する少年を尻目に、少女の語りは続く。

「大体そなた——その容姿はおそらく有名な異端の子——ライク・ブランセニツクであろう？ そんなそなたが何故、世界を美しいと言う？ そなたにとっての世界とは憎むべきものではないのか？」

少年——ライクは異端とされた子供だった。普通の人にはない力を持ち、忌み嫌われる存在である。

それ故に無視や石を投げられる——罵倒を浴びせられるなどの虐めを受けていた。

なのに何故、この少年は“世界が美しい”と言えるのか……。それでもライクは迷いも何もなく即座に返答する。

「何故だい？ 僕は世界を愛しているんだ！ 愛というのは、些細なことでは揺るがないんだよ！」

「……そなたの言うことはわからない……。何故世界を愛していると言えるのだ？ そなたを何が支えているのだ？」

そんな質問攻めの少女に、ライクは不敵に笑う。何を当たり前のことをと。

「世界さ！ 世界が僕を愛しているから、僕も世界を愛しているんだ！」

余計にわからない……。そう思う。

世界が愛しているなど何故わかるかもわからないし、仮に愛していたとして、何故こちらにも愛すのか。

この少年の言葉は何もわからない。

「もういい。去れ。これ以上ここにいれば、そなたは危険にさらされる」

「危険だつて？ 穏やかじゃないね。だが断るよ！」

「な、何故だ……？ 妾が危険と言っているのだ。だから逃げないか！」

「君は当たり前のことばかり言うね！ もちろん！ 君が愛を知らないからさ——」

「そなたこそ意味のわからないことばかり言うな！」

「だから教えてあげると言っているんだよ！ 世界の愛を！」

「そんなこと誰が頼んだ！ 妾はこの色褪せた世界でしか生きられない！ 生きてはいけない！ 愛なんて知らなくていい！」

少女は苦しそうに胸に手を当て、涙目になりながらも、思いの丈を叫ぶ。

そんな少女の想いをライクは、ふっ、と鼻で笑った。

それに少女は、何がおかしい、と言った瞳で睨む。

「そんなこと誰が決めたんだい？ 君かい？ それとも他の誰かい？ そんなものは僕には関係ない！ 僕は皆に愛を伝えたいんだ——」

意味がわからない……何故そんなことをこの少年がしているのか？ それをしてこの少年に何の益があるのか？

この少年の言動は、少女には理解しがたいものだった。

正直、なんと言っているのかかわからない。少女が黙っていると、再びライクが口を開く。

「ああ……この愛をどう伝えたらいいだろうか？ 君はどうしたら愛を知るだろうか？」

「そんなもの……妾にはわからない……そなたの言う世界は、妾にとって色褪せた世界でしかない……」

「なるほどね！ わかったよ！ 君が愛を知る方法が！」

今の会話のどこに納得いくものがあつたのか……、わからないがライクは何か念じ始めた。

「どうするのだ？」

「当然……こうするのさ！」

ライクが手を振り上げる。

その瞬間——一陣の風が舞った。

——ここは……どこだ……？

少女は我が目を疑う。

何故なら、先程まで確かに世界は色褪せていた。景色も花びらも

何もかもが灰色だった。

それなのに何故……。

「何故……世界に色がある……？」

初めての経験だった。

緑色の草原。茶色い樹に桃色の桜。特別な何かがあるわけではない。ただ広い草原に、一本の桜の樹があるだけ。それだけなのに……。

そんな風景は駆け抜ける風に心地よさを感じさせる。

ああ……なんだろうかこの世界は……見たことない世界……初めて見た色褪せていない世界……なんと美しいんだろうか……。

「ようこそ！ 僕の世界へ！」

「僕の？」

「そうさ！ 君が言ったじゃないか！ 僕は異端だと！ これが異端たる所以さ！ 美しいだろう？」

「……ああ……これを見ていたから、そなたは世界が美しいと言えたのか……」

得心がいった、という風に呆然と言う少女に、ライクはふっと笑う。

「残念だけどそれは違つよ」

「え？」

「この世界は結局、僕の作り物でしかないからね。これは僕の美しさの限界が造り出したものさ……僕はね……まだ世界をすべて見れていない。だったら！ これ以上の美しいものがあっても不思議じゃないだろう？！」

「これ以上のものが世界にはあると、そなたは言うのか？」

「そうとも！ 君は“この世界を美しい”と感じた！ それは正しく愛だ！ そして、僕たちが愛せば世界も愛してくれる！ 世界が愛してくれるから、僕たちが愛せるんだ！ 色褪せることなんてないんだよ！」

「美しいと感じる……愛……」

眩く少女は、ふるふると首を振った。

「やはり、妾にはわからない……これがそなたの言う愛なのかも……」

「だったら、僕と探しにいかないかい？ 愛を探しに！」

「愛を……探しに……？」

「ああ……世界を見に行くんだ……ここじゃないどこかに……行き

先なんてない。ただ愛のままに突き進む旅に……」

何かに想いを馳せているのか、うつとりした感じに話す少年を見る少女は思った。

——この男と一緒にいきたい……。

と。

そう思い、ハッと気づく。

他人に興味を持ったのは初めてだと。

そう思うとなんだか……。

「ふっ……ははっ！ はははははっ！」

笑えてきた。

生きてきた灰色の世界に、初めて現れた色を持った世界。

「なんだい？ そんなに笑って。僕はこんなに真剣に話しているのに」

「くく……すまん……なんだか笑えてしまっただけ……」

この世界なら連れ出してくれるかもしれない。

「よかったら、そなたの口からもう一度名前を聞かせてくれないか？」

「もちろんさ！僕は異端の子供の1人——ライク・ブランセニツク！」

この色褪せた世界から、色のある世界へ。

「妾は……そなたと同じ異端の子供の1人——シャグラ・コルセツト。これから、よろしく頼む」

「当然さ！ さあ行こう！ 僕たちの愛を探す旅に！」

そうして少年と少女の世界を渡る旅が始まる。

願うならば……どうかこの目の前の世界が失われませんように……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4649ba/>

異端と呼ばれた子供たち

2012年1月12日19時54分発行